

タイにおける英国ボルネオ社の事業活動

—— 1920年代後半から1930年代前半までのチーク事業 ——

南 原 真

初めに

ボルネオ社 (The Borneo Company Limited) は 1856 年に英国で設立され、同年にバンコクに進出し以降タイの輸出入業務 (精米所および北タイでのチーク伐採事業や製材所経営を通しての米およびチーク商品の輸出等)、海運、銀行、保険の代理店等幅広い業務を展開した。同社のバンコク支店において中核となった事業はチーク事業であり、他の欧州の有力なチーク伐採会社と並んで、タイのチーク産業において重要な位置を占めた。

タイのチーク事業については、1896年に設立されたタイ政府森林局による森林政策、次に、特に初代から3代までの英国人森林局長の役割、さらに英国資本を中心とする欧州の伐採会社の3つの面から考察する必要がある。森林保護とロイヤリティーの増収を図りたいタイ政府ならびに巨大資本を投下して利益の拡大を図りたい欧州の伐採会社は、1920年代および1930年代後半のチーク林のリース権交渉を巡り、それぞれの思惑から在タイ英国外交官を介させ交渉した。本論文では主に以下の三点を明らかにしたい。第一に、ボルネオ社のタイにおける事業、特にチーク伐採事業がロンドン本部にとって海外事業の中でどのような位置付けにあったかを財務諸表から明らかにしたい。第二は、タイにおけるチーク事業を紹介し、それが1920年代後半から1930年代前半にかけてどのように変化したかを明らかにする。最後に、1932年の立憲革命を経てタイ経済ナショナリズムが台頭した中で、1930年代末におけるタイ政府と欧州の伐採会社のリース権を巡る交渉を英国の外交文書を参考にしながら紹介しつつもときながら、タイ側の交渉力の優位性を示したい。

チークは北タイ、ミャンマーの低丘陵地帯から標高900メートルまでの山岳地帯に分布し、高さ20～40メートルに達する高木である。19世紀後半からミャンマーに続くタイの豊富なチーク林が欧州の会社に注目され、1892年ごろには英国の4社がタイでこの事業に従事していた (Sompop, 1989, p.127)。チークは耐久性の高さや耐火性、強度、重厚な色調や光沢などの特性から船舶用材、客車の内装用材、建築材、橋、家具など幅広い需要があった。北タイで伐採されるチークは川に浮かぶようになるまで2～3年かけて枯死乾燥させ、雨季に倒木して丸太にし、象などを利用し河川の集積所に集められた。6月から10月の雨季にかけて丸太は急流の河川の支流を下り、ピン川やヨム川などの主な河川の流れが緩やかな箇所では

タイにおける英国ボルネオ社の事業活動

(400 から 500 本の丸太) にし、チャオプラヤー川のパークナムポー税関を目指し、最終的にバンコクへと向かった。その他の経路としては北タイからサルウィン川を経てミャンマーへ、またメコン川を経てサイゴンへ輸出されたが、チャオプラヤー川経由の丸太が圧倒的に多かった¹⁾。

ボルネオ社に関する書籍は、同社の沿革を記述したロングハースト (Longhurst, 1956)、また同社を所有するインチケープグループには、グリフィス (Griffiths, 1977) などがある²⁾。また、既存研究ではマラヤにおける戦後の同社の事業を記述したホワイト (White, 1996) がある³⁾。ボルネオ社は、ロンドンに本部をおきながらも海外の事業活動の中心拠点をシンガポールに置き、カルカッタ、香港、バタビア (現ジャカルタ)、シヤム (タイ) とサラワク (現マレーシア) との貿易から発展していった。同社の事業の中心はサラワクとタイの 2 箇所であり、サラワクでは当初アンチモン、辰砂、石炭、金などの鉱物資源の採掘、1870 年代以降はサゴ、インディゴ、タバコ、コショウ、ガンビール、ゴムなどの栽培、タイにおいてチークの伐採が重要な事業であった⁴⁾。タイでの欧州の伐採会社の事業活動や外国資本の役割は下記の文献を参照されたい⁵⁾。

利用資料について

英国のロンドンにあるギルドホール図書館 (Guild Hall Library, 以下 GHL と記す) には英国商社を中心とする企業アーカイブが併設されており、ボルネオ社はインチケープグループのファイルに保管されている⁶⁾。同グループの目録には企業名がアルファベット順に 109 社掲載されている。それらの企業の業種は海運、倉庫、ジュート生産、紅茶、ゴム農園、貿易、木材伐採、代理店など多岐にわたり、事業の中心となるインドやパキスタンなどの南アジア、マレーシア、タイ、インドネシアなどの東南アジア、アフリカなどの地域を網羅している。

ボルネオ社のファイルは、Mss. 27,174-474 で、おおまかに定款、取締役会議事録、セクレタリーペーパー、会計、海外事業、投資・買収・子会社、広報、人事、資産記録 (ロンドンのみ)、100 周年記念祝典、写真、海外支店など 12 の分野に分類されている。海外事業では代理店業務と一般契約、ジャワとスマトラ、マラヤとシンガポール、フィリピン、サラワク・北ボルネオとブルネイ、シヤム (タイ) の 6 つのファイルに分類、投資・買収・子会社では欧州、オセアニア、中南米、アジアなど 12 の国・地域にファイルが分類され、アジアでは香港、インド、ジャワとスマトラ、マラヤとシンガポール、サラワク・北ボルネオとブルネイ、シヤムの 6 つのファイルが存在している⁷⁾。なお、海外支店の記録はサラワクのクチンとシヤムのバンコクの 2 支店のみである⁸⁾。このように膨大な資料には手書きやタイプされた書類、写真、帳簿、地図、資産表が含まれ、整理されていて閲覧することができる。

本論文では主に上述の資料を利用しながら、英国立公文書館 (Public Record Office, 以下

PRO と表記) の英国外交文書も活用した。この外交文書にはタイのチーク産業に関する報告も含まれている。特にタイ政府とのリース契約を巡る交渉過程に於いて在タイ英国人外交官が中心になり利害関係のある英国チーク伐採会社の各社と連携して、英国の利益をいかに拡大または死守するか詳細な報告がバンコクから本省に送付されているので、英国側のねらいがどこにあったかが明らかである。

本社決算書から見るタイのチーク事業と資産

ボルネオ社の 1920 年代から 1930 年代の貸借対照表と損益計算書を見ながら、同社にとってタイのチーク伐採事業がいかに重要であったかを確認したい。同社の前述の決算書類は毎年 4 月 1 日から翌年の 3 月 31 日の会計年度で例年 10 月の株主総会で発表され、年度毎に重役のレポートの印刷物として保存されている⁹⁾。その報告書には各年度の貸借対照表と損益計算書が掲載されているだけではなく、当該年度の主な事業の報告、配当の方針と有無、重役の任命や交代、監査役の承認などが記述されている。さらに同社が重要を置く事業である、東南アジアで展開されているタイのチーク、スマトラ島での紅茶やゴムのプランテーション、マラヤでのボルネオモーターズ、シンガポールやペナンのレンガ生産事業、代理店の展開状況などが主に報告されている。

同社の貸借対照表にはタイのチーク事業が資産の項目の中に毎年独立して計上されており、1922 年から 1928 年まではチークと象のストックとチークのロイヤリティーが揭示され、1929 年から 1930 年はチークと象のストックのみとなっている。1931 年と 1932 年はチークの在庫、設備、象の集団と標記され、1933 年以降はチークの在庫、設備、象の集団マイナスリザーブとなっている。象はチークの伐採事業では河川の搬出場所まで運ぶ動力として幅広く利用され、一頭当りの価格も高くタイにおける有力な欧州のチーク伐採会社は多くの象を保有していた¹⁰⁾。チーク事業は資産の中ではチークと象のストックからチークのロイヤリティーを差し引いた額が示されている。表 1 から確認していくと 1922 年から 1928 年まではチークの在庫と象は 1922 年に 71 万ポンドを超えたが、それ以降は 50 万ポンド台で推移、一方ロイヤリティーは 12 万ポンドから 14 万ポンドの幅であった。同時期のチークと象のストックからチークのロイヤリティーを差し引いた額の総資産に占める割合は、1922 年の 28 % をピークに徐々に低下し 1928 年は 14 % まで落ち込んだ。1929 年以降はロイヤリティーの標記がなく、チークと象のストックが総資産に占める割合は 1929 年～1931 年は 11 %、1932 年に 15.9 % に上昇するものの、1933 年から 1938 年までは 12 % から 15 % の範囲で推移した。

同報告書の中でタイのチーク事業は毎年取り上げられ、出荷、需要、輸出市場、価格、サイズ、品質、事業の見通し、収益性、世界大恐慌の影響など記述の量は少ないものの多面的に分析されていた。1920 年代では出荷面では良好であるが、サイズや品質の両面で向上が期

表 1 ボルネオ社の貸借対照表におけるチーク資産

	1922年	1923年	1924年	1925年	1926年	1927年	1928年
チークの在庫と象	£710605 4s 5d	£583258 1s 5d	£559771 19s 4d	£572168 1s 3d	£595707 6s 3d	£577784 6s 8d	£528031 8s 7d
△チークのロイヤリティー	£147498 11s 8d	£137189 17s 2d	£137777 11s 1d	£135797 19s 8d	£129767 12s 1d	£125322 13s 8d	£124976 16s 2d
計	£563106 12s 7d	£446068 4s 3d	£421994 8s 3d	£436370 1s 7d	£465939 14s 2d	£452461 13s 0d	£403054 12s 5d
総資産	£1975914 7s 0d	£2087111 0s 4d	£2122896 17s 3d	£2457956 19s 6d	£2918227 3s 8d	£2826158 14s 2d	£2866682 11s 10d
ロイヤリティーを除いたチークの在庫と象が総資産に占める割合	28.49%	21.39%	19.87%	17.75%	15.96%	16%	14.05%

	1929年	1930年	1931年	1932年
チークの在庫と象	£324231 18s 2d	£288264 14s 2d	£270934 17s 0d	£270934 17s 0d
総資産	£2751439 19s 11d	£2457246 1s 3d	£2283619 3s 3d	£2160117 16s 3d
チークの在庫と象が総資産に占める割合	11.78%	11.73%	11.86%	15.90%

	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年	1938年
チークの在庫、設備と象の集団 (△リザーブ)	£184425 14s 11d	£215568 14s 4d	£229464 15s 6d	£232666 6s 4d	£247716 0s 0d	£244942 7s 6d
総資産	£1514591 12s 2d	£1475981 16s 9d	£1469356 0s 10d	£1580748 0s 1d	£1726619 7s 2d	£1700732 10s 8d
チークの在庫、設備と象の集団 (△リザーブ)が総資産に占める割合	12.18%	14.60%	15.62%	14.71%	14.35%	14.40%

注：△はマイナスを示す。1931年と1932年の標記はチークの在庫、設備と象の集団となっている。数字のsは英国の貨幣単位シリング (shilling) でポイント (penny) の20分の1。dはペニー (penny) でポイントの240分の1。シリングの12分の1。1971年に十進法に改めシリングは廃止。ペニーはポイントの100分の1に改めた。(出所) Ms 27.185. GHL, Annual reports and accounts. 1922-1944の各年度版より作成。

待される（1925年と1926年の報告、以下年のみ記述）、輸出先のインドやパーツ高の為替の影響（1922年）、チーク事業は収益性がある（1928年と1929年）などの課題はあるものの、積極的な評価がなされていた。一方、1930年代に入ると状況は一変し、チーク事業は赤字に転じた。これは世界大恐慌の影響で一次産品の価格が減少したことも関連があるが、主な輸出市場であるインドがタイのチークに輸入関税を引き上げたことや為替の変動（1932年）も大きな要因であった。同社のチーク事業は1933年の報告書において販売が数量と金額の両面で減少して赤字となり、今後の損失に備えるために特別チーク準備金（Special Teak Reserve）を設立した。1934年から1936年にかけての各年度の報告書は、この特別チーク準備金によって赤字が充当されたと記述している¹⁴⁾。チークがわずかなながらも利益を生じるようになるには1937年の報告を待たなければならなかった。

タイのチーク輸出額と数量の推移と主な輸出市場

タイのチーク輸出の推移を1910年代から1930年代にかけて見てみたい。タイの主要輸出4品目の同期間の輸出額を表2から見ていくと、1910年代ではチークは米に続く第二位の輸出品目であったが、1920年代に入ると米、スズに続く第3位と後退した。1930年代では1934/35年度以降、米、スズ、ゴムに続く4位の輸出品目となった。チークの輸出額の推移では第一次世界大戦終了後の1919/20年と1920/21年にブームを迎え、第二のブームは1920年代末になっている。

チークの輸出量と輸出額の推移を表3から見ていくと、1910年代では輸出量は継続して減少傾向にあったが、輸出額と同様に1919/20年と1920/21年にかけて再び大幅に増加に転じた。トン当たりの平均価格は1919/20年に191パーツとピークを記録した。貿易統計のチークの数量はトンで50立方フィートトン（1.41584立方メートル）であって、以下トンと表示する。1920年代では輸出は年度末の1928/29～1929/30年度にかけて、輸出額は約1100万パーツ、輸出量は7万トンを超えピークとなった。一方、1930年代に入ると輸出は額、数量ともに減少に転じ1932/33年度には世界恐慌の影響があり額で331万パーツ、数量で3.7万トンと底を記録したが、年度末にかけて徐々に額・数量ともに回復傾向を見せている。

輸出先では1910年代と1920年代では大きな変化が見られる（表4を参照）。1910年代ではインドとセイロン（スリランカ）が最大の輸出先であったが、1920年代では主力輸出先として香港の比重が高まり、香港と中国が重要な輸出市場となった。1920年代のインドとセイロンへの輸出の減少はインドがタイのチークに対して15%の輸入関税を課したこと、他方ビルマ（ミャンマー）産のチークへの輸入関税は免除したため、ビルマ産チークが地理上の優位からくる輸送コストおよび為替の面でタイのチークと比較して有利となり競争力が増したことによる。タイ政府の商業・通信省が刊行した1926年の英字雑誌のThe Recordでは、チ

表2 1910～1930年代のタイ主要4品目の輸出額

(単位:1000 バーツ)

年度	米	チーク	スズ	ゴム	小計	米	チーク	スズ	ゴム	小計
1910/11	91061	7624	16	23	98724	92%	8%			100%
1911/12	65840	6112	3	50	72005	91%	9%			100%
1912/13	65320	5600	6	88	71014	92%	8%			100%
1913/14	98699	5203	1	90	103993	95%	5%			100%
1914/15	85347	5044	29	42	90462	94%	6%			100%
1915/16	87702	4912	113	30	92757	95%	5%			100%
1916/17	99965	5079	162	34	105240	95%	5%			100%
1917/18	97862	5506	45	36	103449	95%	5%			100%
1918/19	132096	5597	5	30	137728	96%	4%			100%
1919/20	123083	13421	10	68	136582	90%	10%			100%
1920/21	29223	12350	14929	428	56930	51%	22%	26%	1%	100%
1921/22	140984	7111	9314	204	157613	89%	5%	6%		100%
1922/23	128211	5679	12026	697	146613	87%	4%	8%	1%	100%
1923/24	143836	6197	17720	1879	169632	85%	4%	10%	1%	100%
1924/25	139628	6702	20925	3420	170675	82%	4%	12%	2%	100%
1925/26	167409	5637	22386	10182	205614	81%	3%	11%	5%	100%
1926/27	165226	8219	22840	5214	201499	82%	4%	11%	3%	100%
1927/28	201156	9947	22424	6366	239893	84%	4%	9%	3%	100%
1928/29	175124	11242	20030	2941	209337	84%	5%	10%	1%	100%
1929/30	139087	11219	22638	2956	175900	79%	6%	13%	2%	100%
1930/31	103068	9738	16852	1236	130894	79%	7%	13%	1%	100%
1931/32	77500	4950	13433	512	96395	80%	5%	14%	1%	100%
1932/33	94201	3312	14304	379	112196	84%	3%	13%		100%
1933/34	82967	4274	24542	2359	114142	73%	4%	22%	1%	100%
1934/35	98437	4589	26347	9301	138674	71%	3%	19%	7%	100%
1935/36	90836	5052	23374	13213	132475	68%	4%	18%	10%	100%
1936/37	95944	8652	29809	23525	157930	61%	5%	19%	15%	100%
1937/38	75343	9112	37528	22667	144650	52%	6%	26%	16%	100%
1938/39	97419	6694	30814	25101	160028	61%	4%	19%	16%	100%
1939/40	113300	7885	41331	30167	192683	59%	4%	21%	16%	100%

(出所) Wilson, (1983), p.213, 214, 216, 217 より作成

ークの今後の見通しについて高いグレードのものは以前ほど多くないこと、香港を含む中国の市場が最も重要な市場の一つになっている、英国を除く欧州市場では活気がない、戦時中にチークの代替品が発見され、現在効率的に利用されている、インド市場でのビルマ産チークとの競合などを説明し、厳しい展望を紹介している¹²⁾。

1930年代の輸出動向では、1937/38年度のファイナンシャル・アドバイザーのレポートが、チーク輸出の構造的な問題点を指摘している¹³⁾。同レポートによれば森林から伐採されるチークのサイズが小さくなり、また品質も減少しており、その根拠を輸出額・数量の増加と森林局の歳入の変化と比較して分析している。1936/37年度の輸出額の増加は、すでに税金が

表 3 タイのチーク輸出額と輸出量の推移,
1910/11 - 1939/40 年度

	輸出額 パーツ	輸出量 トン	平均価格 パーツ
1910/11	7624092	89165	85.51
1911/12	6112097	75080	81.41
1912/13	5600282	60854	92.03
1913/14	5203287	51236	101.56
1914/15	5044459	46921	107.51
1915/16	4911867	47872	102.60
1916/17	5078849	44735	113.53
1917/18	5506368	44825	122.84
1918/19	5597408	36930	151.57
1919/20	13420966	70202	191.18
1920/21	12349720	71617	172.44
1921/22	7111071	59248	120.02
1922/23	5678789	51856	109.51
1923/24	6196597	58278	106.33
1924/25	6702015	58285	114.99
1925/26	5636661	42851	131.54
1926/27	8218583	59339	138.50
1927/28	9947249	70231	141.64
1928/29	11241864	76871	146.24
1929/30	11218773	74643	150.30
1930/31	9738284	66087	147.36
1931/32	4950173	42946	115.27
1932/33	3312029	37719	87.81
1933/34	4274479	45864	93.20
1934/35	4588808	45161	101.61
1935/36	5052217	44531	113.45
1936/37	8651730	70717	122.34
1937/38	9112126	66641	136.73
1938/39	6694205	58306	114.81
1939/40	7885209	88796	88.80

注：トン は 50 立方フィートトンである。平均価格は少数第 3 位以下を四捨五入した。

(出所) *The Foreign Trade and Navigation of the Port of Bangkok, The Foreign Trade and Navigation of the Kingdom of Siam, Annual Statement of the Foreign Trade and Navigation of the Kingdom of Siam* の各年度版から作成。

支払われた丸太の貯蔵分からのものであり、輸出量の増加分（約 2 万 6000 トン）は通常同年度の相関的なロイヤリティーの増加が期待されるが、現状はそうではない根拠として同年度の森林局の歳入が前年度と比較してほとんど増加していないことをあげている¹⁴⁾。

チークの輸出は貿易統計では、角材、厚板、屋根板、丸太・木口、小割材、その他の 6 つ

表4 チーク輸出量の内訳

輸出先内訳 (%)

年度	輸出量 トン	平均価格 パーツ	英国	その他 欧州諸国	インドと セイロン	香港	中国	日本	その他
1909/10	76090	91.67	11.26	7.85	62.36	15.49	3.04
1910/11	89165	85.51	13	12.94	55.37	10.55	2.1	3.2	2.84
1911/12	75080	81.41	8	12.47	58.98	8.93	3.11	5.2	3.31
1912/13	60854	92.03	12.83	7.92	50.7	16.54	4.22	2.26	5.53
1913/14	51236	101.55	12.47	10.35	48.32	13.79	6.78	3.46	4.83
1914/15	46921	107.51	15.81	8.88	56.35	10.88	4.32	0.7	3.06
1915/16	47872	102.6	13.6	3.33	59.71	12.6	6.14	0.94	3.68
1916/17	44735	113.54	9.85	2.15	59.93	10.95	6.37	3.16	7.59
1917/18	44825	122.8	..	0.22	57.47	19.87	8.85	3.2	10.39
1918/19	36930	151.56	0.74	3.18	32.07	30.56	18.32	3.77	11.36
1919/20	70202	191.17	15.25	3.64	47.97	11.32	7.65	4.14	10.03
1920/21	71617	172.45	11.16	5.18	47.68	13.88	5.92	5.06	11.12
1921/22	59248	120.02	1.77	5.85	37.24	29.92	9.97	7	8.25
1922/23	51856	109.5	3.32	3.94	27.45	38.71	10.31	9.85	6.42
1923/24	58278	106.32	3.75	4.64	21.69	44.2	11.34	6.69	7.69
1924/25	58284	114.89	6.97	7.73	22.27	36.77	8.41	8.07	9.78
1925/26	42851	131.54	7.29	5.97	22.4	19.57	13.34	12.62	18.81

注：トンは50立方フィートトン，平均価格は50立方フィートトン当たり。

(出所) Bourke-Borrowes (1927), p.50

に分類されている。1910年から1920年代にかけての輸出額の推移を見ると，角材の比率が圧倒的に高く，次に厚板や小割材が続いている（表5を参照）。一方輸出量でも角材の比率が高く，1920年代前半までは角材に続き小割材が2位，厚板の順となっていた（表6を参照）。

1937/38年度のファイナンシャル・アドバイザーのレポートでは，売上高総利益に占めるチークのロイヤリティーの割合を試算しているので，紹介したい。試算の基準は総利益の4割をロイヤリティーとして政府に納入，残りの6割を会社の取り分として決めていた。ファイナンシャル・アドバイザーは，1925年度から1935年度にかけてタイでチーク伐採事業を行っている主要欧州会社6社（英国4社，フランス1社，デンマーク1社）の会計監査をそれぞれ分析し，総利益に占めるロイヤリティーと税（内地税）の割合を計算した。

その試算によれば，同期間の累計の総利益は2343万1230パーツ，ロイヤリティーと税は1586万245パーツ，純利益は757万985パーツ，ロイヤリティーと税の総利益に占める割合は67.68%であり，政府の取り分は67%，会社側は33%であることが示された。また同期間における政府の森林関連の項目の歳入は累計で4168万5264パーツで，前述の6社からのロイヤリティーと税は，森林歳入の38%を占めているとも指摘されている¹⁵⁾。

表 5 1910 ~ 1930 年代のタイのチーク商品輸出額
(額：バーツ)

仏歴 西暦	2452 (1909/10)	2453 (1910/11)	2454 (1911/12)	2455 (1912/13)	2456 (1913/14)	2457 (1914/15)
角材	4721099	5070693	4254086	4030204	3942894	3617664
厚板	975273	1193695	815127	733705	483032	516431
屋根板	10679	19288	18837	29590	13423	33913
丸太・木口	35402	44726	39542	33882	60222	65343
小割材	767345	1158713	873692	672147	582105	673620
その他	465259	136977	110813	100754	121611	137488
合計	6975057	7624092	6112097	5600282	5203287	5044459

(出所) *The Foreign Trade and Navigation of the Port of Bangkok Years 2455 (1912-13) and 2456 (1913-14)*, pp.112. 2457 年は, *The Foreign Trade and Navigation of the Port of Bangkok Years 2457 (1914-15) and 2458 (1915-16)*, p.109.

仏歴 西暦	2458 (1915/16)	2459 (1916/17)	2460 (1917/18)	2461 (1918/19)	2462 (1919/20)	2463 (1920/21)	2464 (1921/22)	2465 (1922/23)
角材	3038360	3407311	3703268	3563901	7712304	6798412	4277681	3366842
厚板	626369	611981	658048	928076	2599471	1890636	794472	1096544
屋根板	21975	46211	13358	31304	68911	132028	19060	25666
丸太・木口	98970	100012	75921	79419	313265	144314	324200	118732
小割材	994988	780882	855595	782129	2159995	2386846	1089005	604043
その他	131205	132452	200178	212579	567020	997484	606653	466962
合計	4911867	5078849	5506368	5597408	13420966	12349720	7111071	5678789

(出所) *The Foreign Trade and Navigation of the Port of Bangkok Years 2461 (1918-19) and 2462 (1919-20)*, pp.111. 2463-2465 年は, *The Foreign Trade and Navigation of the Kingdom of Siam Years 2466 (1923-24) and 2467 (1924-25)*, p.145.

タイにおける英国ボルネオ社の事業活動

仏歴 西暦	2466 (1923/24)	2467 (1924/25)	2468 (1925/26)	2469 (1926/27)	2470 (1927/28)	2471 (1928/29)	2472 (1929/30)
角材	3498542	3394428	2782212	4073618	4873967	5680948	4796456
厚板	1096164	1417284	1177236	1885575	2354626	2638454	2933761
屋根板	17768	16995	16751	7775	32340	23522	12350
丸太・木口	209965	226725	142366	198235	208432	210843	226067
小割材	709552	1084190	1152583	1346597	1709821	1743592	1770399
その他	664606	562393	365513	706783	768063	944505	1479740
合計	6196597	6702015	5636661	8218583	9947249	11241864	11218773

(出所) *Annual Statement of the Foreign Trade and Navigation of the Kingdom of Siam Year 2470 (April 1927 to March 1928)*, pp.156-7. 2471-2472年は、*Annual Statement of the Foreign Trade and Navigation of the Kingdom of Siam Year 2474 (April 1931 to March 1932)*, p.158.

仏歴 西暦	2473 (1930/31)	2474 (1931/32)	2475 (1932/33)	2476 (1933/34)	2477 (1934/35)	2478 (1935/36)	2479 (1936/37)	2480 (1937/38)	2481 (1938/39)
角材	3813533	2328218	1658232	1695340	1498507	1563717	2140934	2289233	1524952
厚板	2896877	1026020	510729	798851	1144785	1291096	2098593	1619443	1250859
屋根板	13780	5256	3083	186	1984	675	258	1558	83
丸太・木口	183435	135127	106188	95750	78870	123197	298503	204334	188158
小割材	1703653	852317	467822	472654	648144	1036471	2431754	2930766	2175029
その他	1127006	603235	565975	1211698	1216518	1037061	1681688	2066792	1555024
合計	9738284	4950173	3312029	4274479	4588808	5052217	8651730	9112126	6694205

(出所) *Annual Statement of the Foreign Trade and Navigation of the Kingdom of Siam Year 2477 (April 1934 to March 1935)*, pp.161. *Annual Statement of the Foreign Trade and Navigation of the Kingdom of Thailand Year 2481 (April 1931 to March 1932)*, p.187.

表 6 1910 ~ 1930 年代のタイのチーク商品輸出量
(単位：トン)

仏歴 西暦	2452 (1909/10)	2453 (1910/11)	2454 (1911/12)	2455 (1912/13)	2456 (1913/14)	2457 (1914/15)
角材	53224.21	61407.24	54576.44	45650.27	39375.47	34422
厚板	6062.03	7484.25	5313.05	4408.09	2866.01	2810
屋根板	144.33	272.33	278.31	372.13	190	345
丸太・木口	757.49	1036.35	906.02	706.45	831.21	857
小割材	9008.13	17351.27	12667.43	8631.09	6787.3	7247
その他	6892.31	1612.23	1337.47	1085	1185.15	1237
合計	76090	89165.17	75080.22	60854.03	51236.14	46921

(出所) *The Foreign Trade and Navigation of the Port of Bangkok Years 2455 (1912-13) and 2456*
pp.112-3. 2457 年は、*The Foreign Trade and Navigation of the Port of Bangkok Years 2457 (1914-15)*
and 2458 (1915-16), p.109.

仏歴 西暦	2458 (1915/16)	2459 (1916/17)	2460 (1917/18)	2461 (1918/19)	2462 (1919/20)	2463 (1920/21)	2464 (1921/22)	2465 (1922/23)
角材	30980	31077	31547	24662	44537	43696	38333	33615
厚板	3960	3160	3179	4379	8671	6780	3942	5822
屋根板	238	486	139	314	540	851	178	315
丸太・木口	1051	1322	1137	1018	2838	1438	3193	1613
小割材	10313	7480	7200	5046	9722	11106	7719	5308
その他	1328	1208	1621	1510	3891	7744	5880	5180
合計	47872	44735	44825	36930	70202	71617	59248	51856

(出所) *The Foreign Trade and Navigation of the Port of Bangkok Years 2461 (1918-19) and 2462 (1919-20)*, pp.110, 2463-2465 年は、
The Foreign Trade and Navigation of the Kingdom of Siam Years 2466 (1923-24) and 2467 (1924-25), p.144.

タイにおける英国ボルネオ社の事業活動

仏歴 西暦	2466 (1923/24)	2467 (1924/25)	2468 (1925/26)	2469 (1926/27)	2470 (1927/28)	2471 (1928/29)	2472 (1929/30)
角材	35680	31722	23734	34289	39283	43777	36725
厚板	6286	8382	6295	9252	11116	12279	13263
屋根板	177	141	148	70	291	209	122
丸太・木口	2784	3000	1736	2509	2396	2321	2579
小割材	6501	9476	7796	8276	11045	11451	11057
その他	6850	5564	3142	4943	6100	6834	10897
合計	58278	58285	42851	59339	70231	76871	74643

(出所) *Annual Statement of the Foreign Trade and Navigation of the Kingdom of Siam Year 2470 (April 1927 to March 1928)*, pp.156-7. 2471-2472年は、*Annual Statement of the Foreign Trade and Navigation of the Kingdom of Siam Year 2474 (April 1931 to March 1932)*, p.158.

仏歴 西暦	2473 (1930/31)	2474 (1931/32)	2475 (1932/33)	2476 (1933/34)	2477 (1934/35)	2478 (1935/36)	2479 (1936/37)	2480 (1937/38)	2481 (1938/39)
角材	30176	22621	20044	20157	16442	15436	20714	19103	15664
厚板	12487	5318	3464	5153	7390	7850	12289	7397	6337
屋根板	131	52	32	2	24	7	3	12	1
丸太・木口	2013	2075	1931	1799	1461	1436	3262	2629	3262
小割材	11859	7208	5376	5110	6275	9313	19133	20896	18590
その他	9421	5672	6872	13643	13569	10489	15316	16604	14452
合計	66087	42946	37719	45864	45161	44531	70717	66641	58306

(出所) *Annual Statement of the Foreign Trade and Navigation of the Kingdom of Siam Year 2477 (April 1934 to March 1935)*, pp.160. *Annual Statement of the Foreign Trade and Navigation of the Kingdom of Thailand Year 2481 (April 1931 to March 1932)*, p.186.

表 7 欧州伐採会社への 1924 年チーク林リース許可契約リスト

会社名	森林区 (県名)	許可面積	許可本数
ボンベイ・ビルマ・トレーディング社	Mae Pai (Maehongson)	5670.4	36113
	Mae Ko (Tak)	96	16564
	Mae Ping, West (CM, Lampung)	4352	82072
	Mae Chang, Mae Ang (Lampang)	3059.2	124168
	Mae Soi (Lampang)	567.2	36916
	Nam Haeng, Nam, Nam Sa (Nan)	3347.2	15157
	Huai Luang, H. Phiang (Lampang)	?	132
	小計 8 カ所	17092	310990
アングロ・サイアム社	Mae Gao (Lampang)	704	145448
ボルネオ社	Mae Ping, West (CM)	4230.4	59502
	Mae Tui (Lampang)	1604.4	36270
	Mae Toen (Tak)	1410.4	45262
	Muang Fang (CM)	364.8	35800
	小計 5 カ所		222282
ルイ・レオノウェンス社	Mae Wang, East (Lampang)	3040	22994
	Mae Mok (Lampang, Phisanulok)	2240	33202
	Mae Yom, West (Phrae)	280	46618
	小計 3 カ所		102814
イースト・エシヤティク・フランシイド	Mae Yom, East (Phrae)	1434	110312
	Mae Chaem (CM)	2540	49000
	小計 Mae Pai (Lampang)	178.3	16701
			176013

注：CM はチェンマイ。北原 (2009, p.40) には華人系会社ラムサム、北部有力者を含む 13 の契約と国家納入税率 (1 本当り種類別) が掲載されている。

(出所) 北原 (2009, p.4) より一部転載。原データはタイ公文書館 R7 KS5 5/4p 3.となっている。

バンコク支店のチーク事業の動向

ここからバンコク支店のチーク事業の動向の詳細を見てみたい。同支店の資料は各ファイル毎に書簡、地図、写真、米精米所、米倉庫、チーク、海運関連、損益計算書、台帳などに整理されている。この中でチーク事業に関する資料は多くあり、北タイでの各森林区におけるリース契約、各森林区の地図や写真、各年次事業報告、タイ政府とのロイヤリティー交渉、伐採や運送費用などのコスト分析、チェンマイ支店の書簡など多岐にわたっている。

1924 年チーク林リース許可契約リスト (北原, 2009, p.40) をもとに、主要な欧州のチーク伐採会社の中でのボルネオ社の位置付けを確認したい¹⁶⁾。タイ政府は 1924 年に英国 4 社とフランス 1 社の計 5 社と華人系会社ラムサムや北部支配者の 7 名にチーク林リース許可契約を与えた。許可本数 (本) で各社がどのくらいの割当てを確保したかを表 7 で見ると、外国 5 社には計 95 万 7547 本が与えられ、ボンベイ・ビルマ・トレーディング社が 31 万 990 本、ボ

タイにおける英国ボルネオ社の事業活動

ルネオ社は22万2282本と上位2社で約56%を占めた¹⁷⁾。ボルネオ社が許可された森林はチェンマイ(2カ所)、ターク、ラムパーンにあった¹⁸⁾。

さて1924年から1933年までのボルネオ社バンコク支店のチーク事業の年次報告書を活用して、1920年代から1930年代前半にかけての状況を考察したい¹⁹⁾。この報告書は1924年から1928年まではコンバージョン・ステートメント、1929年から1933年まではチーク部門の作業報告となっているが、後者はバンコク支店の損益計算書に掲載されていたチーク部門の損益も含まれて掲載内容が一部変更されている。両報告書の会計年度は4月1日から翌年の3月31日であるので、各年度の報告書は前年からその年の3月末での事業・会計報告であることに留意する必要がある。1924年と1925年の報告ではバンコクの同社の製材所でのチークの製材の生産高や製材所の支出が中心に報告されていたが、1926年以降は角材、厚板などの輸出数量や輸出先、国内販売数量、丸太の販売数量(バンコクとパークナムポー)、次年度の事業見通しなど多岐な内容に発展した。

ここでは1926年から1933年までの8年間のこれらの報告書の中から、輸出、国内販売、市場の動向分析に主に焦点をあてて紹介する。ボルネオ社の1920年代半ばから1930年代前半にかけてのチーク製材商品の輸出量と輸出先を表8から見てみたい。大まかな特徴として、第1に輸出量は1920年代後半では順調に増加し1928/29年度に7706トンのピークを迎えるが、1930/31年度と1931/32年度は大幅に減少し底となった、第2に主な輸出先は年度に差異はあるものの1920年代ではボンベイと香港であったが、1930年代前半に入るとボンベイへの輸出が激減し、スリランカのコロomboが台頭して香港と並んで主な輸出先となった。

1920年代後半の輸出市場は香港や広東でのボイコットやストライキ、ボンベイ市場の動向やパーツの為替状況に大きく左右された。例えば1927年度の報告書では、1926年の後半8月から11月にかけて急激な為替の変動で香港市場に出荷できなかったことを伝えている。また、1930年の報告書では1929/30年度の香港への輸出は、対前年比1673トンも激減し香港市場は年間を通して実質上停止していると記述している。1930年代に入るとボンベイへの輸出が激減しており、1932年の報告書はビルマ産のチークは輸入関税25%を支払う必要がないのでタイ産は競争することが不可能であるとしている。一方、香港向けに関しては、1931/32年度の輸出のほとんどが質の悪い角材で、前年度は1級や2級の板材と小角材が中心であったので、比較することはできないと伝えている。コロomboへの輸出に関しては、1933年の報告書で1930年代前半にかけて同地域への輸出が減少傾向にある要因を家具業者やプランテーションの改装への最終的な出荷が前倒しに行われ、現在後者の顧客が全てチークで改装する費用に不足しているためとしている。

製材所で生産された角材は11種類、厚板(2種類)、板材(2種類)、小角材(3種類)などさまざまなサイズ、品質、等級に分けられ、各市場に向けて出回っている²⁰⁾。厚板と板材の違いは厚さなどのサイズの違いによっている²¹⁾。輸出量と国内販売量の推移を表9から確

表8 ボルネオ社バンコク支店のチーク製材商品輸出货量と輸出先
(収益：立方フィート当たりパーツ)

輸出先	1924/25年度 トン	収益	1925/26年度 トン	収益	1926/27年度 トン	収益	1927/28年度 トン	収益	1928/29年度 トン	収益
ボンベイ	213.43	1.45	1742.72	1.73	4210.15	1.92	2695.04	1.89	1691.42	2.00
香港	4533.51	1.62	1781.95	1.58	1235.97	1.82	2496.40	1.48	1855.36	1.36
南アフリカ	113.26	3.75	111.91	4.58	337.96	4.72	305.40	4.88	353.00	4.64
欧州	323.01	3.08	153.62	3.15	325	4.57	362.10	5.09	563.79	4.65
日本	10.02	3.89	23.3	3.89	90.23	4.3	120.06	4.47	310.34	4.61
上海					50.43	2.07			11.84	1.26
アメリカ			8.95	4.75			40.06	5.14		
コロンボ							901.71	2.20	2920.45	1.97
クチン							0.40	5.30		
ベナン							4.00	1.56		
総計	5193.23	1.76	3822.45	1.82	6250.12	2.22	6925.16	2.15	7706.20	2.26

輸出先	1929/30年度 トン	収益	1930/31年度 トン	収益	1931/32年度 トン	収益	1932/33年度 トン	収益
ボンベイ	2147.51	2.35	663.25	1.75	94.95	2.29	748.73	1.40
コロンボ	1919.31	1.97	1115.89	2.09	742.71	1.78	327.25	1.55
南アフリカ	437.65	4.56	330.33	3.85	479.99	3.24	280.17	2.97
欧州	427.32	4.94	150.19	4.91	15.08	3.89	330.24	2.43
香港	182.38	1.61	73.64	3.36	1009.28	1.50	1833.97	1.03
日本	120.28	4.62	105.33	4.71	137.19	3.31	60.08	2.73
シンガポール							155.46	1.38
その他	68.52	2.51	62.82	1.86	50.22	2.20		
総計	5302.97	2.63	2456.45	2.47	2529.42	2.06	3735.90	1.47

(出所) Ms 27.471, GHL, Teak Operations Annual Reports 1924-1933. 各年度版より作成。

表9 パンコク支店のチーク製材商品総売上量
(単位：利益は立方フィート当たりパーツ)

	1924/25年度			1925/26年度			1926/27年度		
	トン	パーツ	利益	トン	パーツ	利益	トン	パーツ	利益
輸出	5193.23	456322.75	1.76	3822.45	348074.22	1.82	6250.12	694231.43	2.22
国内販売	3240.66	239176.62	1.48	3461.58	288975.65	1.66	6220.51	555534.97	1.79
計	8433.89	695499.37	1.65	7284.03	636149.89	1.75	12470.63	1249766.39	2.00
まき		26034.27			23906.56			35426.73	
総計		721533.64			660056.43			1285193.12	

	1927/28年度		1928/29年度		1929/30年度		1930/31年度		1931/32年度		1932/33年度	
	トン	利益										
輸出	6930	2.14	7706	2.26	5303	2.63	2456	2.47	2529	2.06	3736	1.47
国内販売	6429	1.78	7676	1.63	7955	1.58	10525	1.54	7432	1.22	5717	1.08
総計	13359	1.97	15382	1.94	13258	2.00	12981	1.72	9961	1.49	9453	1.19

注：1924/25～1926/27年度は計と総計の金額が、小数点や一桁二桁で満りがあるが、原データを掲載した。
(出所) Ms. 27471, GHL, Teak Operations Annual Reports, 1924-1933. 各年度版より作成。

表 10 バンコク支店チーク部門の利益

(単位：パーツ)

年度	1927/28	1928/29	1929/30	1930/31	1931/32	1932/33
総利益	761809.47	649310.04	756742.65	448659.15	△ 9781.19	△ 328003.03
丸太会計	416492.42	253993.92	300456.93	355904.21	△ 19747.47	△ 19798.19
材木会計	518092.13	607857.94	660417.31	322032.89	203173.98	△ 120096.18
委託販売会計	17460.11	10264.35	16401.63	3436.05	584.03	54.27

注：△は赤字を示す。純利益の英語表示は Total Profit で表記されているが、バンコク支店の帳簿を調べると純利益である。丸太会計の英語表示は Rough Timber a/c である。Rough Timber は（枝を落としただけの）軽く整えた材木であるが、各年次報告書では丸太を意味しているので、丸太とした。

(出所) Ms 27,471, GHL, Teak Operations Annual reports の 1929 年から 1933 年の各年度版の報告書から作成。

認したい。まず総売上量では 1928/29 年度に 1 万 5382 トンがピーク、一方底は 1925/26 年度の 7284 トンであった。輸出量と国内販売量の内訳は、1924/25 年度から 1928/29 年度までは輸出量が国内販売量を上回っていたが、1929/30 年度から 1932/33 年度にかけては国内販売量が輸出量を大幅に上回っている。また立方フィート当たりの利益では輸出が一貫して国内販売よりも高いことも特徴となっている。1926 年の報告書には国内販売量の中には広東の業者がタイに支店を設立しボルネオ社のバンコク支店から買付をして直接広東へ出荷したものも含まれていると伝えている。

バンコク支店のチーク部門の 1920 年代後半から 1930 年代前半にかけての利益の推移を表 10 から見てみたい。丸太、材木（製材）、委託販売の 3 つの会計毎に損益が計算され、全体の純利益が表示されている。黒字基調であった純利益が赤字に転落したのは 1931/32 年度で、この年度の 9781 パーツの赤字は翌年度には約 34 倍の 32 万 8003 パーツに急増した。その背景には前述のボルネオ本社の決算書で特別チーク準備金が設立されたことがある。1932/33 年度は材木（製材）が大幅な赤字を計上していることが際立っている。1932 年の報告書は 1932/33 年度の見通しについて、需要がなくなったため丸太業者はかつて高値で取引された筏（チークの丸太で作成）の買付契約を続けることができず、全ての倉庫は在庫で満杯なのにボルネオ社の製材所を含めて全ての製材所は半稼働か休止しているとの悲観的な見解を示した。

1930 年代末のタイ政府と欧州の伐採会社のリース権を巡る交渉

最後に 1930 年代末のタイ政府と欧州の伐採会社のリース権を巡る交渉を英国の外交文書を用いて紹介したい。ここで重要な役割を果たすのは、1932 年の立憲革命以降タイ経済ナショナリズムの台頭を背景に交渉を優位に進めるタイ政府の政治家および官僚と、既存の権益を死守したい欧州のチーク伐採会社、中でも巨額の投資を投下した英国資本と在タイ英国人外

交官との連携である。欧州のチーク伐採会社はタイ政府とはロイヤリティーや伐採管区や伐採量の割り当てを巡り、税の引き上げ反対の点では利害関係は一致するものの、伐採管区や伐採量の割り当てを巡り対立していた。

ボルネオ社のバンコク支店の総支配人を務めたマルコムは、立憲革命直前の1932年5月に同社の会長リッチー（Sir Adam Ritchie）への書簡で当時の状況と1940年のチークリースの見通しについて報告している²²⁾。同文書によるとマルコムは革命が起こりそうな政治情勢について、また英国資本は既に2000万ポンドの投資をタイのチーク産業に投下しているの、現状と将来の利権の確保は必須であり、そのためにも英国のチーク伐採会社は丸一となって英国外務省の窓口である在タイ英国人外交官ドーマーを介し1940年にタイ政府によって行われるチークリースの交渉の場で英国に有利な閉鎖地の開放を要請するよう報告していた。

タイ政府の森林行政は、1896年に設立された森林局を中心に行われてきたが、初代から3代までの森林局長は英国人が就任していた事実は大きい。初代局長はスレード（H.A. Slade, 局長期間1896年～1901年）でビルマの森林行政官僚から招聘され、タイの森林行政の礎を築いた。2代目はトテナム（W.F.L. Tottenham, 同1901年～1904年）、3代目はロイド（W.F. Lloyd, 同1905年～1923年）であった。彼らの尽力により森林に関する法律の整備、行政組織の拡充、ロイヤリティーやチークリース権の設定などタイの森林行政は近代化され大きく発展した²³⁾。この3人の英国人局長とリース契約条件についてはタイ公文書館の資料から分析した論文（北原，2009）が詳しい。1920年代に入ると英国人局長からタイ人局長に代わり、以降タイ人が中心となっていく。英国の外交文書によれば森林局の英国人アドバイザー、パーク・ボロウズ（D.R.S. Borke-Borrowes）が1924年に辞任した理由を報告しているが²⁴⁾、それによると森林局内でタイ人官僚から孤立し仕事がないにもかかわらず給与を支給されるのに心理的抵抗があったためと分析し、彼の代わりに他の英国人アドバイザーをタイ政府に推薦するのは得策ではないと判断した。パーク・ボロウズは失意のうちに辞任したが、タイのチーク産業に関する英文の報告書を1927年に出している。この報告書はタイのチーク産業研究にとって有益である²⁵⁾。

1938年から1939年にかけてチークの伐採権を巡る交渉は本格化し、タイ政府主導による政府管轄下のチーク林の増加と森林保護の流れに対して、欧州のチーク伐採会社は少しでも多くのリース割り当てを確保するよう務めた。森林局長は6月11日に欧州のチーク伐採会社の代表を呼びつけ、15年間のリース（1940年から）とチーク樹林数の半分の伐採を認めることを通告した²⁶⁾。すなわち、タイ政府はチーク樹林の半分管轄下におき保護し、残りの半分がリースされ、契約は既存のリース契約者に、数量は地域のチーク林の実数に近い数を基にすることなどを条件とした。タイ全体におけるチーク木の数96万6684本のうち、半分の48万3342本がリースとして与えられることになった。ここで1924年のチーク林リース契約で外国資本に計95万7547本が割り当てられていたことを考えると割り当て量の激減による

表 11 タイ政府の各社へのチーク伐採割当て量, 1938 年発表

会社名	国籍	木の本数	割合 (%)
ボンベイ・ビルマ・トレーディング社	英国	224706	46.49
ボルネオ社	英国	111845	23.14
フランス・イースト・エシヤティク社	フランス	49108	10.16
レオノーウェンス社	英国	33931	7.02
アングロ・サイアム社	英国	30064	6.22
イースト・エシヤティク社	デンマーク	10488	2.17
アジアのリース保有者 (複数)		23200	4.8
合計		483342	100

(出所) Crosby (Bangkok) No.284, 15 July 1938, F7906/7906/40, FO371/22216, PRO, p.2.

外国資本の衝撃が想像できる。表 11 は主要な伐採会社の割当て量を示しているが、英国の 2 社ボンベイ・ビルマ・トレーディング社とボルネオ社で約 7 割のシェアを占め、残りを英国の他の 2 社、デンマークとフランスの 2 社、タイの地場を中心とするアジアの借地人とが分け合う構図となっている。地域の割り当てはフランスのイースト・エシヤティク社と英国のアングロ・サイアム社は一カ所のエリアのみであったが、その他の会社は 2 カ所ないしそれ以上のエリアを割り当てられていた。この割り当て量には英国の 4 社は満足せず、前述の大手 2 社はさらなる追加の割り当てを要望し、英国の残りの 2 社アングロ・サイアム社とルイ・レオノーウェンス社（以下レオノーウェンス社）は各 3 万本以下の割り当てではチーク事業は採算が取れないので森林局にさらなるコンセッションを求めるとし、バンコク駐在英国公使クロスビーは今後の追加割当てがどのように英国 4 社内での争い（2 強と 2 弱）に影響するか懸念していた。ボンベイ・ビルマ・トレーディング社は同社に対する割り当て量は現在のリースの 3 分の 1 以下の数量でしかなく、かつ伐採するチークのサイズも小さくなってトン当たりの価値も減少していると追加の割り当てを求める根拠を挙げている。

森林局が追加割当てを発表したことにより、事態は大きく変化した²⁷⁾。追加割り当ての分量に対しては、新しい税、プレミアムが従来のロイヤリティーに追加されて課税されることになった。プレミアムとは、旧 1 パーツの girdling fee（樹木から樹皮を輪状に取り除く費用）の代わりに木々の数量に対して課税される。表 12 には各社に対する追加割当てとプレミアムの価格が示されている。ここで注目すべきことは割り当てを受けられたのは英国の大手 2 社を除く欧州の 4 社であり、かつデンマークとフランスの各イースト・エシヤティク社が 4 万本を超える大きな割り当てを得たことである。クロスビーは懸念を表明し英国の利権を守るために追加割り当てに関して 4 つの要因を考慮すべきだと英国の外交文書に記述している²⁸⁾。第 1 に英国はタイのチーク事業に他国と比較して最大の投資を行ってきたので、英国の会社はフランスやデンマークの会社よりも多くの割当ての権利がある、第 2 にアングロ・サイアム社、レオノーウェンス社、デンマークのイースト・エシヤティク社は最初の割当てでは大

表 12 タイ政府の各社へのチーク伐採追加割当て量, 1938 年発表

会社名	国籍	木の本数	追加割当	合計	追加割当下のプレミアム (パーツ/1本につき)
ボンベイ・ビルマ・トレーディング社	英国	約 160000	0	約 160000	
ボルネオ社	英国	111845	0	111845	
フランス・イースト・エシヤティク社	フランス	49108	42329	91437	4.5
レオノーウェンス社	英国	33931	11082	45013	3.5
アングロ・サイアム社	英国	30064	24847	54911	4.5
イースト・エシヤティク社	デンマーク	10488	47109	57597	5.5
アジアのリース保有者 (複数)		23200	わずかな数	23200	4.5 ~ 5.5
合 計		258636	125367	384003	

(出所) Crosby (Bangkok) No.312, 1 August 1938, F8530/7906/40, FO371/22216, PRO, pp.2-3.

変不利であったが、デンマークの最初から 5 倍以上の割当ては阻止しなければいけない、第 3 にフランスのイースト・エシヤティク社の割当ては 9 万 1000 本以上になるが、同社のマネージャーによればメコン河流域の伐採可能本数は 10 万本以下であるので、北タイからメコン河を經由しフランス領を通りサイゴンへ行くチークに対して実質上の事業の許可をフランスに与えてしまう、最後に英国 4 社の中で割当てを巡り 2 強と 2 弱の争いになるのではないかと述べている²⁹⁾。クロスビーは英国の 2 弱の会社の為に外務大臣ブリーディー・パノムヨン、外務アドバイザー、ワンワイタヤーコーン (親王) に面会し、ブリーディーに 2 回書簡を提出した³⁰⁾。当時農業大臣が辞任し、臨時代理大臣としてピブーンが任命されており、大物の 2 人の政治家とクロスビーが交渉を進めた。ピブーンが 2 回目の追加割当ての予定はなくチーク木の全体の半分は政府と国民の為に利用すべきとし、一方クロスビーは外国の会社のみがチーク事業への投資と経験を有していることを理解すべきと主張した。ブリーディーはクロスビーにピブーンに手紙を出すようアドバイスした。クロスビーはアングロ・サイアム社とレオノーウェンス社の 2 社のそれぞれの事業の採算ラインは 7 万 5000 本と強調した。

クロスビーはこの 2 社の為に、1938 年 12 月 6 日付けでブリーディーに 2 通の書簡を提出している³¹⁾。これらの書簡はタイ政府の最初の割当てをベースに書かれており、追加の割当ては考慮されていない。アングロ・サイアム社の窮状を訴える手紙では、同社への割当てが 3 万本以下では事業への必要最低限にも遠く及ばず事業の断念の恐れがある、この 3 万本のうち市場価値があるのは 2 万 2000 本であり、15 年間リースではこの 2.2 万本の年平均出荷数は約 1500 本で不十分であり、最低 7 万 5000 本の割当てがないと事業は継続できないと訴えた。さらに、同社の現行リースで過去 30 年間輸送した丸太のうちの約 3 分の 1 の伐採地であったパヤオ/メ チュン森林が今回の新リースでは完全に除外されている、丸太輸送の為に同社は木材路面軌道に多大な投資をし、タイ政府はこの恩恵を受けているが言及はない、現行のリースでの伐採は年平均 1 万 4000 本の丸太を 15 年間で計算すると 21 万 1429 本にのぼ

表 13 英国 2 社とデンマーク 1 社へのチークリース 1940/55

レオノーウェンス社 (英国)	本数
最初の割当て	33931
追加割当て	24665
計	58596
アングロ・サイアム社 (英国)	本数
最初の割当て	30064
追加割当て	24847
小計	54911
Me Chune Forest	10000
計	64911
イースト・エシアティク社 (デンマーク)	本数
最初の割当て	10488
追加割当て	35688
計	46176

注：アングロ・サイアム社への Me Chune Forest の 1 万本は、同森林の整備をした後に伐採するとの条件がついていた。

(出所) Crosby (Bangkok) No.257, 27 May 1939, F5401/5401/40, FO371/23598, PRO.

ると指摘している。

レオノーウェンス社の支援を訴えるブリーディーへの手紙も前述の書簡と同様に同社の窮状を説明している。現状の 1925 年～1940 年のリースでは 1936 年の丸太の出荷数は平均 1 万 2000 本、1937 年は 1 万 3000 本以上、その他にフランスのイースト・エシアティク社などからの契約の追加分があり、それを含めるとそれぞれ 1 万 7000 本、1 万 8500 本になっている。同社への新リースの割当ては 3 万 4000 本しかなく、年平均では 2262 本しか伐採できず、しかも新しく指定されるメパンラム、メタペの 2 つの森林地域のチークのサイズは小さくかつ伐採しにくいので、何とか 7 万 5000 本の割当ては確保したい旨を伝えていた。

1939 年に入ると事態は大きく進展した。クロスビーの尽力により英国の上述の 2 社はさらなる割当てを得ることに成功した³²⁾。クロスビーの英国本省への文書によると、アングロ・サイアム社は計 5 万 4911 本に追加して、メチュン森林の 1 万本 (品質は貧弱) を得る一方、レオノーウェンス社は 5 万 8596 本の割当てを得た (表 13 を参照)。デンマークのイースト・エシアティク社は 4 万 6176 本となった。英国 2 社への追加分はタイ政府の所有の 50 % の中から供給され、かつ森林局との特別の取り決めで行うとした。ここで表 12 で示された 1938 年の割当て量と 1939 年の新しい割当て量を比較するとアングロ・サイアム社は 5 万 4911 本

タイにおける英国ボルネオ社の事業活動

から6万4911本に、レオノーウェンス社は4万5013本から5万8596本へと増加を示したのに対して、デンマークのイースト・エシアティク社は5万7597本から4万6176本へと減少した。この外交文書にはアングロ・サイアム社とレオノーウェンス社からクロスビーに宛てた手紙が添付されており、そこにはクロスビーの尽力への感謝が述べられていた。アングロ・サイアム社の手紙では、5月22日に外務省に呼び出されアドバイザーのワンワイタヤーコーン（親王）から直接リースの3万64本に追加してMg Ngow 森林（北タイでかつて同社が従事していた）の2万4847本を与えると助言された報告している。さらに、この数字は同社が望んでいる7万5000本にはおよばないが、事業を一応継続していける。またワンワイタヤーコーン（親王）はメ チュン森林の1万本も割当てすると言及してくれたが、ここはかつて同社が従事した地域の一つで現在は閉鎖されており、チークの品質とサイズは直接リースの箇所と比較して劣り、森林整備ぐらいの意味合いしかないと述べていた。

このような経緯をへて、タイ政府は英国の4社との森林リース契約の更新、ロイヤリティー、プレミアムの条件に同意した³³⁾。レオノーウェンス社以外の3社は契約に署名し、同社もここ1～2週間の内に契約するものと見込まれている。デンマークのイースト・エシアティク社も契約済みと聞いているが、フランスのイースト・エシアティク社は1941年まで契約期間があるので、今後森林局との再交渉の余地があるとクロスビーは報告した。彼は新規のリース期間でのチークの割当てで数量と品質が従来と比較して大きく落ち込んでいる点を2つの要因から分析した。最初の要因は森林が過剰に開発され、その結果伐採可能な木々が大幅に減少したこと、第2点はタイ政府が森林の半分を自分自身のために、あるいは指名者に利用させるために保存したためであるとしている。また、彼は新規の15年リースが終了するころには欧州のチーク伐採会社も末路を迎え、タイ人が全て自主的に事業を行うことを主張するであろうと推測している。

ファイナンシャルアドバイザーのドールは、このチークの新規リース契約についてメコン河流域山麓で操業しているフランスのイースト・エシアティク社を除いて1939年11月に契約は締結されたと報告している³⁴⁾。ロイヤリティーは変わらないものの、タイ政府がロイヤリティーに加算してあるケースでは1本当たり4～4.5パーツのプレミアムを賦課されると記述した。各社に割当てられたチークの木々の数量は過去のリースと比べて大幅に小さいことも指摘した。

終わりに

ボルネオ社のバンコク支店のチーク事業は本社の年次報告書や決算書において重要な事業として位置づけられていた。黒字基調であったチーク部門の純利益が赤字に転落したのは1931/32年度においてであり、翌年度には赤字額は32万8003パーツに急増した。この背景

には世界大恐慌の影響を受けてチークに対する需要が大幅に減少したことや、ボンベイや香港、中国の広東などの輸出市場の変化、タイ国内市場の低迷や在庫量の変化などさまざまな要因があった。1930年代末のチーク林のリース権交渉を巡る交渉では、タイ経済ナショナリズムの高まりを受けてタイ政治家と官僚が主導権を取り、英国側は守りに専念しかに英国の権益を死守するかが課題であった。クロスビーの尽力により、英国4社の中で大手ではない2社は割当量の増加に成功した。今後の研究課題として、言及しなかった製材所の経営分析、北タイでのチーク伐採事業、丸太のバンコクでの販売状況、チーク事業の課題などをあげる。

(本論文は2006年度の東京経済大学国内研究の研究成果の一部である。)

注

- 1) 北タイから1896年から1925/26年度にかけて3つの河川で運ばれた丸太の総本数は345万4924本(リジェクションは除く)、チャオプラヤー川経由は278万9511本(80.7%)、サルウィン川は56万4808本(16.3%)、メコン川は10万605本(2.9%)であった。(Bourke-Borrowers, 1927, p.26の表より計算)
- 2) グリフィスの書籍の中でボルネオカンパニーは一章として紹介されている(Griffiths, 1977, pp.128-146)。
- 3) ホワイトの6章 'Business Strategy and the End of Empire: Managing the Borneo Co. Ltd. in Malaya, 1945-1957' を(White, 1996, pp.223-261.) 参照。
- 4) アンチモンは活字合金、軸受合金、化合物半導体の成分として利用、辰砂(しんしゃ)は水銀と硫黄との化合物で水銀生産として利用されている。サゴはサゴヤシの樹幹の髓から採る澱粉で食用にする、インディゴ(インジゴ)は植物の藍から採取して暗青色の染料として使われた。
- 5) タイにおける初期の英国資本は、(Falkus, 1989, pp.117-156), 1855年から1932年までの欧州資本は、(Suehiro, 1989, pp.42-71)をそれぞれ参照されたい。
- 6) 同グループの企業目録番号はMss. 27,001-28,173である。なお、同図書館の企業アーカイブは利用目的を職員に伝えれば簡単に利用できる。文書のコピーはできないが、自分でデジタルカメラで撮影することは許可されている。
- 7) 海外事業のファイル番号は代理店業務と一般契約(Mss.27,232-43)、ジャワとスマトラ(Mss. 27,244-58)、マラヤとシンガポール(Mss.27,259-76)、フィリピン(Ms.27,277)、サラワク・北ボルネオとブルネイ(Mss.27,278-304)、シヤム(Mss.27,305-29)である。また、投資・買収・子会社のアジアのファイル番号は香港(Ms.27,351)、インド(Mss.27,354-5)、ジャワとスマトラ(Mss.27,356-9)、マラヤとシンガポール(Mss.27,360-400)、サラワク・北ボルネオとブルネイ(Ms.27,420)、シヤム(Ms.27,420)である。
- 8) サラワクのクチン支店のファイル番号は、Mss.27,467-70、シヤムのバンコク支店のそれはMss. 27,471-4である。
- 9) 報告書の名称はThe Borneo Company, Limited. Report of the Directors, Balance Sheet and Profit and Loss Accountである。(Ms.27,185, GHL, Annual reports and accounts. 1922-44)
- 10) Sompopは、英国領事報告を利用し、1896年～1939年までのチーク産業に従事する象の数、価格、価値について算出している。1914年では作業用の象1頭の平均価格は5375バーツである

タイにおける英国ボルネオ社の事業活動

(Sompop, 1989, p.131 を参照)。

- 11) 1934年の支出額は記述されていないが、1935年は£29398. 13s. 4d., 1936年は£12929. 3s. 4dをそれぞれ充当した。sはシリング、dはペニーである。
- 12) “Review of the Teak Market” The Ministry of Commerce and Communications, The Record, October 1926, p.382. 1911/12～1915/16年の5年間の平均輸出額は537万4398パーツ、1916/17～1920/21年では839万0662パーツ、1921/22～1925/26年は626万3826パーツであった。
- 13) *Report of the Financial Adviser in connection with the Budgets of The Kingdom of Thailand for the B. E. 2480 (1937-1938)*, p.33-35.
- 14) 同上, p.33
- 15) *Report of the Financial Adviser in connection with the Budgets of The Kingdom of Thailand for the B. E. 2480 (1937-1938)*, p.33-35.
- 16) 北原(2009, p.40)のリストはタイ公文書館の文書R7 KS 5/4:p3から作成されている。
- 17) 地場企業ラムサムと北部有力者7名への割当ては計約19万本である。1909年チーク林契約者リストと1924年の同契約の比較は北原(2009, pp.38-42)を参照。
- 18) 同上。Ms.27,314, GHLのファイルには1922-54年までの北タイでの森林区でのボルネオ社と他社の事業エリアのカラー地図が入っている。
- 19) Ms. 27,471, GHL, Bangkok branch, Siam: annual reports of teak operations in Siam. 1924-33.
- 20) 例えば角材では欧州, Baipoh, BCL Red, (A) Red, [A] Red, [C] Red, (S) White, (B) White, [B] White, [D] White, (B) Blackに分類されている。
- 21) 厚板(planks)は幅6インチ(15.24cm)以上、厚さ2.5インチ(6.35cm)以上、板材(boards)の幅は厚板と同じであるが、厚さは2インチ(5.08cm)までとなり、厚板の方が厚い。(Bourke-Borrowes, 1927, p.45)
- 22) Mr.Dormer to Mr. Orde, 18 May 1932, F4260/4260/40, FO371/16261, PRO. この英国外交文書にはマルコムからボルネオ社の会長リッチーへの書簡(1932年5月18日付け)が添付されている。
- 23) タイの森林行政については、Krompamai, 2539, 100pi Krompamai 2539(森林局100年)を参照。
- 24) Waterlow (Bangkok), No.214, 20 December 1926, F738/738/40, FO371/12534, PRO.
- 25) D.R.S. Bourke-Borrowers (1927)を参照。
- 26) Sir J. Crosby (Bangkok), No.284, 15 July 1938, F7906/7906/40, FO371/22216, PRO.
- 27) Crosby, Bangkok, No.312, 1 August 1938, F8530/7906/40, FO371/22216, PRO.
- 28) 同上。
- 29) 同上。デンマークのイースト・エシアティク社の割当ての大幅な増加は、同社のトップのデンマークのアクセル(Axel)王子が英国・デンマーク駐在タイ大使、プラヤー・ラーチャウォンサンに圧力をかけたのではないかと記述している。
- 30) Crosby, Bangkok, No.528, 16 December 1938, F13413/7906/40, FO371/22216, PRO.
- 31) 同上。2通の手紙(34/52/38, 34/53/38)は同ファイルに添付されている。
- 32) Crosby (Bangkok), 27 May 1939, F5401/5401/40, FO371/23598/PRO.
- 33) Crosby (Bangkok), No.577, 22 November 1939, F12351/5401/40, FO371/23598/PRO.
- 34) *Report of the Financial Adviser in connection with the Budgets of The Kingdom of Thailand for the Half-Year 1st April to 30th September B.E. 2482 (1939) and the Year B.E. 2482-2483 (1939-1940)*, pp.42-43.

引用文献

[一次資料類]

(英国ロンドン, ギルドホール図書館)

Ms.27,185, GHL.

Ms.27,471. GHL

(英国国立公文書館)

Dormer to Orde, 18 May 1932, F4260/4260/40, FO371/16261, PRO

Waterlow (Bangkok), No.214, 20 December 1926, F738/738/40, FO371/12534, PRO

Crosby (Bangkok), No.284, 15 July 1938, F7906/7906/40, FO371/22216, PRO

Crosby, Bangkok, No.312, 1 August 1938, F8530/7906/40, FO371/22216, PRO

Crosby, Bangkok, No.528, 16 December 1939, F13413/7906/40, FO371/22216, PRO

Crosby (Bangkok), No.257, 27 May 1939, F5401/5401/40, FO371/23598/PRO

Crosby (Bangkok), No.577, 22 November 1939, F12351/5401/40, FO371/23598/PRO

[政府機関年次報告書・逐次刊行物]

Office of the Financial Adviser, *Report of the Financial Adviser in connection with the Budgets of the Kingdom of Siam.*

Office of the Financial Adviser, *Report of the Financial Adviser in connection with the Budgets of the Kingdom of Thailand.*

The Statistical Office, His Majesty's Customs, *the Foreign Trade and Navigation of the Port of Bangkok.*

Department of Customs and Excise, *Annual Statement of the Foreign Trade and Navigation of the Kingdom of Siam.*

Department of His Majesty's Customs, *Annual Statement of the Foreign Trade and Navigation of the Kingdom of Siam.*

Ministry of Commerce and Communications, *The Record*

[文献類]

Bourke-Borrowes, D.R.S. 1927, *The Teak Industry of Siam. Technical and Scientific Supplement to The Record*, Bangkok, The Ministry of Commerce and Communications.

Falkus, Malcolm. 1989, 'Early British Business in Thailand' in R.P.T. Davenport-Hines and Geoffrey Jones (eds.), *British Business in Asia since 1860*, Cambridge: Cambridge University Press.

Griffiths, Percival, 1977, *A History of the Inchcape Group*, London: Inchcape & Co. Limited

Longhurst, Henry. 1956, *The Borneo History: the history of the first 100 years of trading in the Far East by the Borneo Company Limited*, London: Newman Neame for the Company

Sompop Manarungsan. 1989, *Economic Development of Thailand, 1850-1950 Response to the Challenge of the World Economy*. Bangkok: Institute of Asian Studies Chulalongkorn University.

Suehiro Akira. 1989, *Capital Accumulation in Thailand 1855-1985*, Tokyo: the Centre for East Asian Cultural Studies.

タイにおける英国ボルネオ社の事業活動

White, Nicholas J. 1996, *Business, Government, and the End of Empire Malaya, 1942-1957*, Kuala Lumpur, Oxford University Press.

Wilson, Constance M. 1983, *Thailand: A Handbook of Historical Statistics*, Boston: G.K. Hall & Co.

Krompamai, 2539 (1996), 100pi Krompamai 2539 (森林局 100 年)

北原淳, 2009, 「近代タイのチーク材管理政策－伐採リース契約を中心に－」 龍谷大学経済学論集 第 48 号 (3・4), 23-47 ページ所収。